

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年9月12日(金)

雑感「多忙」と「多忙感」

県内某市教育長のお話です。

「思うに『多忙』であることと『多忙感』を持つことは大きく違うのではないかと。教師は生徒に寄り添い、生徒が成長しているときは、忙しくても充実感があり多忙には感じないものだ。生徒も同じである。」

このお話の中の『多忙』『多忙感』という部分は、『負担』『負担感』という言葉を入れても成り立つのではないだろうか。負担と多忙若干、意味に違いはあるものの、充実した毎日を送っていれば『負担』があっても『負担感』は感じないで済むのではないだろうか。

私は、教える子達と永い付き合いをしたいと思って仕事をしました。お陰様で、最年長の教える子は46歳、最年少は5歳で、多くの教える子達に囲まれ、節目に我が家を訪ねてくれたり、電話をくれたり、楽しい教職生活を送ることができています。今でも子ども達と接することができ、充実しています。この充実した生活を送るためには、担任時代に味わった苦しみや心を鬼にしたこともあります。そして私が担任時代に気を付けていた視点を紹介します。今でも振り返りの視点にしています。

- 甘やかしの関わりは子どもをダメにする
- 指導のない関わりは子どもをダメにする
- 逃げ腰の関わりは子どもを増長させる
- 本気でない関わりはすぐ見破られる
- こだわりを持った関わりはいつか理解される

この信条、常に自分を振り返ることの出来るというより振り返り、自己反省していかなければならないとは思っています。まだまだ思うままにならないところとは、精進が足りないようです。頑張ります。

「費用対効果」を考える

費用対効果とは予算と効果を額面で比較したものというところから解かり

てしようか、現在では「スパ」と言った方がしっくりきますね。私たち教師の仕事はこれが中々測りにくい仕事です。教育活動の結果がどこで現れたか解らないからです。私の場合、それを測る物差しは、結婚式であったり、同窓会であったり、身の上相談の件数であったりでしょうか。自慢話になるかもしれませんが、我が家には元日から教える子達が年始めにやって来ます。正に教える子達の縦割り活動のようになっています。この子達が自分の子どもを連れてきたり、結婚しました、結婚しますと相手を連れてきたりとか、嬉しい一日となっています。そのような教える子達の繋がりは、私自身の教師としてのパフォーマンスを検証する機会となっており、自分のパフォーマンスに間違いはなかったと確信する場面でもあります。

さて、教師を含め社会生活を営むすべての人に自分のパフォーマンスの検証の視点として「費用対効果」の視点は重要です。給料(税金)分の仕事ができているかということとです。私の個人的な考え方ですが、教師は常に時代に合わせた教育活動を展開しなければなりません。常に新しいことに挑む姿勢が必要なのです。教師自身のアップデートが必要なのです。私はこれまで、新しい仕事(依頼)を二つ返事で引き受けてきました。それが自身のアップデートに繋がったと思っています。

シリーズ「自分を語る」#33

2学期のある日、黒石原の一人の子ともは身をもって私に大切なことを教えてくれました。それは、教職生活の中での最大の学びです。

ある日の朝、健太(仮名)の担任が血相変えて病棟から帰ってきたのです。職員室に駆け込むや否や、その先生は泣き崩れました。

「健太君が死んでしまった……」

私は何を言っているのやら状況が掴めないでいましたが、「そういうことか」と悟った時は体が動かず、茫然自失といった状態でした。死因は呼吸不全でした。前日、病棟に帰る時に異常はなかったのですが、真夜中に痰を外に出せず急性肺炎を発症してしまい、看護師さんが気付いた時にはすでに心肺停止状態でした。享年6歳、小学1年生でした。

次の日、通夜、あくる日葬儀・肅々と進んでいく儀式。健太の人生は6年、どのような人生だったのでしょうか。棺に収まる健太の顔はとても穏やかでとても綺麗でした。私達に何かを訴えているようにも見えました。

健太の人生は我々の人生の何分の一？、またやりたいことが沢山あったはずで、自問自答の日々を続け、健太の死は私にある変化をもたらしました。

「子ども達の貴重な時間を私達教師が預かっている。目の前にいる子どもの成長は止まらない。土曜も日曜も厚も夜も止まらない。止まらない人生の半分を、私達教師が預かっている。その責任の重みを私達教師は自覚し、子ども達、保護者、地域住民、県民、国民からの負託に答えなければならぬ。教師であり続けるために、私は24時間責任の重みを自覚し、初心を忘れず子ども達と向き合っていく。」

私が黒石原養護学校にいたのは平成2、3、4年度でした。その間にも多くの教える子達が亡くなり、その度に淋しい想いをすると同時に、自分の教師としてのパフォーマンスは、期待に沿ったものだったのかと振り返る時間でもありました。目の前は生きて頑張っている子ども達か沢山のので、悲しみに暮れてはかりはいられません。毎年、子ども達の実態は変わります。その子達のニーズに合わせて、楽しく思い出深い、掛け替えのない学校であることを目指した時間でした。今でも生きて頑張っている教える子達(も)、いい年のおじさんですが、とパソコンでメールのやり取りをしています。彼らに教えてもらったことを胸に、教師として恥ずかしい仕事をしたいと強く思います。

黒石原の経験は今の自分のパフォーマンスの原点とも言えるものですが、楽しさと厳しさが入り混じった、結構過酷なものでした。私は教える子の入院退院と死を経験し、自分の考え方を180度方向転換しました。

それから、日々が忙しやうに、教育活動の良し悪しなどはあまり考えず、子どもたちのためにという視点に立ち仕事に取り組みました。当時の校長は「正しい」や「正しい」と思ったことをやってみなさいと言ってくれたこともあり、かなりハチャメチャな活動をしていくことを思い出します。(つ)(つ)